まめ

例えばの話だ。

「お前は弱いから後ろに下がってていいぞ。」

なんて言われたら悔しいと思うのが戦士ってものだ。

ついでに「弱いから」とか見下した姿勢で物を言うべきでは無いとおれは思うわけで。

「お前の方がおれより足が遅いんだからおれの後ろに下がってていいんだぞ！」

ガシャンと壊れていくイミテーションを据わった眼で見れば少し苛立ちが収まった気がした。

「大体、なんで後ろにいなきゃなんねーんだよ！」

クラウドにそっくりな顔をしたイミテーションの顔を踏みつぶすとイミテーションは声もなく、ただガラガラと崩れるだけだった。

「………はぁ、情けな。つーかむなしい。」

キラキラと光るイミテーションの欠片の傍に腰を下ろす。

「クラウドの分からず屋、鈍感、根暗、無口…」

例えばの話だ。

予想外に強い相手がいて、仲間がそいつに苦戦していたら

「加勢する」

と言うくらいは仲間としては普通なのではないかと思う。…例えその仲間が男でも女でも加勢くらいは許されると思うのだが。

「どうして怒られなければいけないんだ？」

ゴシャ、ガシャンと音を立てながら崩れていくイミテーションから剣を引き抜き、ホルダーに収める。

あとは仲間たちと合流するべきだとは思うのだが、どうにも足が進まないで立ち尽くしている。

「…………」

何がまずかったんだ？加勢すること自体がまずかったのか？あんたはそんな下らないプライドは持ってないだろう。

「……俺がいけなかったのか？」

誰も答えはしないが答えてくれ。コスモスだったら答えられるだろう。是非神様の意見を聞かせてほしい。

などといつまで悩んでいても仕方が無い。

砂のように足にかかる残骸を振り払い歩き出した。

「何か用ですか」

「……何故敬語なんだ？」

「何か用ですか？」

「……あんたが何故そんなに怒っているのか聞きに来た」

それだけですか。ほーそうですか。いや別に不満があるわけじゃないけど。ありませんけど。

「怒ってません。おれが不機嫌な理由がわからないのはなぜですか？」

「……あんたと俺は違うからだ」

あ、クラウド今「こいつめんどくせえ」って顔したな…。悪かったな！面倒くさい奴で！

「当たり前だろ。どうせクラウドさんのが強いですよね。おれなんて弱いですよね。ガキですよね」

「だから何故敬語なんだ。大体、俺はそんなことを言っていないぞ。」

「………くやしかったんだよ」

「悔しい？」

きょとんとするクラウド。お前その顔してると結構幼く見えるな。

「そうだよ。クラウドに後ろ下がってろなんて言われるのが悔しかったんだよ」

「何故。」

「なんでって……おれは」

どっちかっていうと一緒に戦いたかったっていうか…。

「あんた、怪我してただろう」

「は！？怪我？かすり傷だろ？」

少し熱を持っている頬を指差せばクラウドは考え込むような顔をする。

「怪我は……怪我だ。」

「………過保護」

「…あんた限定でな」

「認めるのかよ！ってえ？え？今ちょ、」

はしっとクラウドの脇腹辺りの服を摘まめばクラウドがククッと笑う。

「冗談だ」

「…………はは、冗談ね、ジョーダン」

この野郎。

頬を引き攣らせたまま手を離せばクラウドはくるりと体を反転させる。

「全く子供扱いするなよな～」

「それはすまなかった」

「……なんか謝罪軽くね？」

「今度から大人扱いでもするか？」

顔だけこっちを見たクラウドの顔はニヤリ。という表現がぴったりで。

「………お、おて、お手柔らかによろしくお願いシマス…」

うっかり恰好いい。とか思っちまったりして。

「な、なぁクラウド、今度から大人扱いするんだったら、もう後ろに下がってろ。とか言うなよ！絶対言うなよ！？」

「あれは援護射撃を頼んだつもりだ。」

なんだよそれ、分かりにくい！そうか、悪かったな。とか笑いながら話しつつ、クラウドの背中を押して歩く。ぐいぐい押して歩く。そしたらクラウドが爆弾を落とした。

「あんたを守りたくなるんだ。」

おれは弱くない。おれは女じゃない。守んなくったっていいって。なんでお前に守られなきゃいけないんだよ。えと、期待させんなよ。おれは、おれは…

ほらなんか言え。言え！深く考えるな！

「……バッツ？」

くるりと振り向いたクラウドと目が合う。

顔…顔見られた！！

「な、ななななんだよ！ほら行くぞ！戻るぞ！」

慌てて背中を押し直そうとした手を取られて驚いてクラウド見ればクラウドは

「別にあんたの事を弱いと思ってるわけじゃない。」

とはっきり言った。

「じゃあっ、守んなくたっていいじゃんかっ」

ああああぁぁぁあああ声ひっくり返ってやんのアホかやだもう埋まりたい。貝になりたい。二枚目になりたい。今おれ上手い事言った。言ってないけど。

「クラウドは変だ」

お、おれの方が変だ。顔あついし。熱いし、頭まわんないし。心臓の音丸聞こえだし、変な奴って思うだろこれ。

「今のあんたもだいぶ変だ」

「だ、だよな」

知ってる。ていうかその、あのですねクラウドさん、できれば手を放していただけると………。

「気づいてると思うが…」

「………」

クラウドから目を離して、地面と睨めっこをするとクラウドの髪が額に当たる。

「し、知らない！」

「ふっ…」

「笑うなっ！」

子供扱いしないって言ったばっかだろ！ギロ、とクラウドを睨めばクラウドはおれの後頭部に手を当てて額をコツンとぶつける。

「知らないなら、教えてやる」

鼓膜を震わす声に背筋がざわざわして、期待通りの言葉に心臓が痛いくらいに熱くて。それを笑うクラウドが余裕たっぷりって感じでなんだか悔しかったから

「おれの方が先にクラウドの事好きになったんだからな！」

なんて言って猛ダッシュでクラウドから逃げるように走った。

頬に当たる風は冷たくて気持ちよかった。